新しい振興開発の時代に入った沖縄

オムロン株式会社　代表取締役会長
日本経営者団体連盟　副会長
（沖縄振興開発審議会委員）
立石　信雄

私は、この何年間か、沖縄の振興開発に関わる会議に参加させて頂く機会が多かった。

一つは、一九九七年六月から始まって、三年間続けられた「沖縄米軍基地所在市町村に関する懇談会提言の実施に係わる有識者懇談会」、いわゆる、「有識者懇談会」の委員で、各市町村におけるプロジェクトの立案ならびに実施状況を点検し、吟味し、助言を行ってきた。

もう一つは、沖縄の振興開発に関する重要事項について、内閣総理大臣に対して意見を申し出る「沖縄振興開発審議会」の委員である。これは、二〇〇〇年十一月から就任し、現在も審議を続けている。

こうした諸会合を通じて、沖縄の現状を見てきたが、何といっても沖縄の人々の振興開発への粘り強い情熱と、人に対する心のやさしさが大変印象的である。

「有識者懇談会」は、日米安全保障体制下で、日本全体の七十五％の米軍基地が集中することによる有形、無形の大きな負担と重圧を担ってきた沖縄の市町村の人々に対して、それから来る閉塞間を和らげ、将来への希望に繋がる夢のあるプロジェクトを市町村の人々の意見で実現して行くことを、国として支援するために設置された内閣官房長官の私的諮問機関である。それが、適切に行われるように望ましい事業の性格や実施の在り方を構想し、政府に提言してきた。

具体的には、既成市街地の活性化、新しいふるさとづくりによる地域振興、離島における産業振興、青少年の教育・啓蒙などのプロジェクトであった。

従来は、ややもすると箱物型公共工事に慣れ親しんできたため、いきなり事業性、採算性、自立性を期待することはいささか難しさがあった。しかし、当該市町村からは、積極的な応募があり、振興開発への強い意欲と熱心な努力には本当に頭が下がる思いがした。例えば、「チーム未来」というプロジェクトでは、民間有志が組織をつくり諸事業の企画から実施にいたるまで積極的に参加、協力し智恵と力を提供した。

こうした中で、稲嶺新知事が登場し、従来、振興開発で叫ばれてきた「本土との格差是正」を訴える考えから、「沖縄の長所を生かし不利益の克服を図る政策」に切り替えてきている。稲嶺知事の言葉を借りれば『魚はいらない釣竿をくれ』という主張である。この考えにそって、これまでの三次にわたる振興開発計画は来年で終わるが、新たな時代に向けた沖縄振興新法の制定及び新たな沖縄振興計画の策定に向けた取組が、現在、政府を挙げて進められている。

新しい考え方の中には、例えば、基地反対を唱えるだけでなく、ハイテク技術やＩＴに堪能な退役米軍人を沖縄の企業で働いてもらい、産業活性化に貢献してもらうといった極めて前向きな、従来の発想では到底考えられないものもある。まさに、沖縄イニシアティブであり、沖縄自身が中心となって振興開発を図ろうとする考えが台頭してきている点が注目される。

他方、「有識者懇談会」の座長を務められた島田慶応大学教授は、将来、日本は労働力不足になるから外国人労働力を導入すべきという。年間数十万人の外国人がきて日本の技術を学び、日本語を覚え、日本の文化を学んで日本の職場で働いて国へ帰って頂く。その日本へ受入れる最初の場、拠点を沖縄にすべきという。理由は、沖縄は文化的にも距離的にも大変外国とくにアジアに近い。そして、沖縄の人は心が大変オープンでエンターテイメントの才能もあるからだという。私は、これが実現されれば、何年か後には、何百万人もの外国人が日本に対しての友邦、友人になる。沖縄は世界の沖縄になり、人づくりの面で徹底的に世界貢献できるのではないかと思う。

沖縄には『イチャリバチョーデー』（知り合ったらみんな兄弟）という言葉があるという。まさに、世界と友好を結ぶのに沖縄ほどふさわしい土地はない。いま、ＮＨＫの朝のドラマ「ちゅらさん」が話題となっている。これは、昔は、日本の何処ででも見られた親子愛、兄弟愛、夫婦愛の原点をそこに見るという意味で人気を得ているのであろう。

私は、近い将来、沖縄が日本で最も人気のある世界の沖縄となる日を心から期待している。本当に沖縄県民に向かって『チバリヨー』（頑張ってください）と申し上げたい。そして、日本全体が、真の自律の途を歩き始めた沖縄の振興開発を温かい目で見守っていくべきであると切に願っているのである。